

# 奈良・平城宮・京跡

1 所在地 奈良市佐紀町・北新町・三条大路一丁目・二条大路南一丁目、大和郡山市九条町

2 調査期間 平城宮内裏東方東大溝地区 一九八六年(昭61)三月～十一月、同佐紀池南辺地区 一九八六年一月、左京三条一坊一・八坪 一九八七年一月～二月、左京三条二坊三・四坪 一九八六年七月、左京三条二坊七坪 一九八六年九月～一九八七年四月、右京八条一坊十四坪 一九八六年十一月～二月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 町田 章

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡・都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一 内裏東方東大溝地区(第一七二次調査)

調査区は、内裏東外郭とその東方にある埴積基壇建物群からなる官衙(内裏東方官衙)とに挟まれた東大溝SD二七〇〇を中心とする地区である。検出した主な遺構は、掘立柱建物二二棟、門一棟、築

地塀二条、掘立柱塀二七条、溝一〇条などである。木簡は、東大溝SD二七〇〇、内裏東方官衙内から東大溝に注ぐ五条の暗渠、東西溝SD二三五〇とその南北にある溝状の堆積、掘立柱南北塀SA一二九〇七の柱穴から出土した。

SD二七〇〇は平城宮東半部を南流する基幹排水路である。これまで、第一二九・一三九・二一・一五四次の各調査(北から順に)で検出しており、今回は二次と一五四次の間で約一二〇mにわたって調査を行った。二次調査区以北では、兩岸を玉石で護岸した石組溝であったが、今回の調査区では一五四次調査区と同様に、石組は東岸のみで西岸は素掘りのままであった。また何度かの改修が行われたとの知見もえられた。SD二七〇〇の堆積層は大きく六層に分けられ、木簡はすべての層から計四三九六点(うち削屑二七七六点)が出土した。最下層から養老七々神亀元年、底から二層目から天平～天平宝字年間、三・四層目からは天平勝宝～天平宝字年間の紀年銘木簡がそれぞれ出土した。また伴出した土器や軒瓦も概ね層序に従い平城宮出土遺物の編年に矛盾せず、SD二七〇〇は奈良時代を通じて順次埋没していったと考えられる。SD二七〇〇からは、木簡以外にも多量の遺物が出土した。木製品では、人形等の祭祀具、独楽・木球などの遊戯具、物差、蒔絵の八角棒状品、黒漆塗の把頭等、金属製品では、皇朝錢、銅製人形、海老錠、帶金具等、土器では、人面墨書土器やミニチュア土器等、瓦埴類では緑釉埴等が注目され

る。文字資料としては木簡以外に、「造宮内」「宮内省」「内舍人所」<sup>〔大カ〕</sup>「舍人寮」「女官所」「大炊」「中衛」「衛□」「主典□」「序」「上番」「下番」「考」「考番」「槐皮膏」「神人」などの墨書のある土器、「足」「修」の刻印や「東」と筧書きのある瓦、「猷軍器□」と墨書する埴などがある。

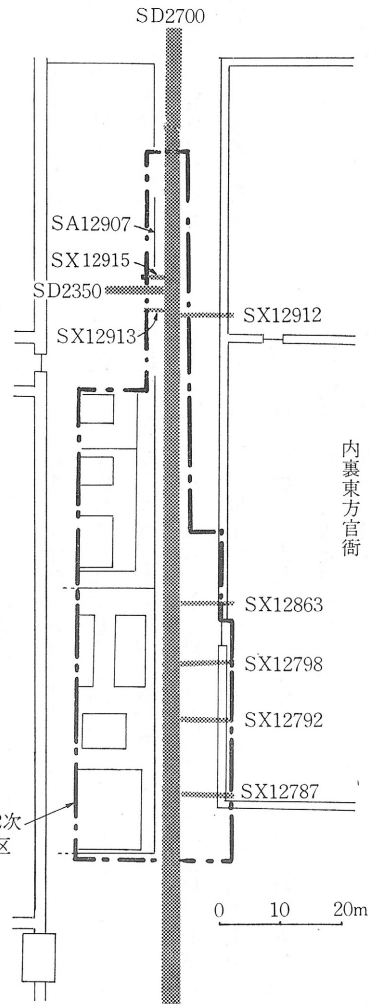
SX一二七八七・一二七九二・一二七九八・一二八六三・一二九一二は内裏東方官衙内から東大溝に注ぐ暗渠で、全部で木簡

一三六六(うち削屑一二三三)が出土した。SX一二七八七・一二七九二・一二七九八には木樋が残り、またSX一二七八七・一二七九二・一二八六三には改修の痕跡がある。

SD二三五〇は内裏内郭内の井戸SE七九〇〇から東大溝に注ぐ素掘りの東西溝で、二度の改修を受けている。木簡は三三三三(うち削屑二二)が出土した。

SX一二九一三・一二九一五は東大溝の西壁で検出した溝状の堆積で、木簡一〇点(うち削屑一点)が出土した。いずれも東大溝に注ぐ東西溝の流出口の可能性があるが、詳細は不明である。

SA一二九〇七は東大溝の西岸沿いにある南北塀で、四間分を確認した。その柱穴から木簡二点が出土した。



内裏東方東大溝地区略図

二 佐紀池南辺地区(第一七七次調査)

本調査は平城宮西北辺にある佐紀池の南で実施された。検出した奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物一棟、溝四条で、二次に及ぶ整地などの関係から四期に区分できる。木簡は、第一次整地土下の木屑・炭層と東西溝SD一二九六五から出土した。

第一次整地土下の木屑・炭層からは木簡二七六六(うち削屑七〇点)が出土したが、同じ層から和銅〜養老六年の紀年銘木簡とともに、平城宮土器Ⅱ(靈龜〜天平初年頃)の土器、平城宮出土軒瓦編年第一期(和銅〜養老頃)の軒丸瓦・軒平瓦が出土し、これを覆う第一次整地土からは平城宮土器Ⅱの土器、軒瓦編年第二期(養老末年〜天平一七年頃)の軒瓦が出土した。

SD一二九六五は調査区のほぼ中央で検出した素掘りの東西溝で、幅約二・六m、深さ約〇・五mを測る。この溝は第二次整地土の上から掘られている。木簡は三点が出土し、ほかに平城宮土器V(宝亀(延暦初年頃)の土器、軒瓦編年第Ⅲ期(天平一七年(天平宝字頃)の軒瓦)が出土しており、奈良時代末期まで存続したことがわかる。

### 三 左京三条一坊一・八坪(第一八〇次調査)

本調査は平城宮朱雀門跡の南東で実施された。検出した主な遺構は二条大路南側溝SD四〇〇六と朱雀大路東側溝SD九九二〇である。木簡は二条大路南側溝から出土した。

SD四〇〇六は素掘りの東西溝で、幅約三・三m、深さ約〇・四mを測る。溝内の堆積はおおむね上下二層に分かれ、伴出遺物は極めて少ない。木簡は上層から二点が出土した。

### 四 左京三条二坊三・四坪(第一七四一〇次調査)

調査区は四坪の西北部にあたる。奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物七棟、掘立柱塀七条、井戸一基、三・四坪の坪境小路とその南北両側溝等で、A、Dの四期に区分できる。木簡はB期の井戸SE三九三〇の埋土から一点が出土した。この井戸は井戸枠が抜き取られていて、埋土からは奈良時代中頃から後半にかけての遺物が伴出している。

### 五 左京三条二坊七坪(第一七八次調査)

調査区は七坪の南半分を占め、特別史跡宮跡庭園の北に接する。

奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物五〇棟以上、掘立柱塀三九条以上、溝一〇条以上、井戸一四基、坪境道路一条、坊間路一条、坪内道路二条、旧河川数条などであり、それらは七期に区分できる。木簡は溝SD一四、掘立柱建物SB五五の柱抜き穴、及び東二坊坊間路の西側溝SD一〇六から出土した。

SD一四は古墳時代より存続していた孤川水系の流路を奈良時代初期に幅を狭く造成し、中期に廃絶した、幅三・七m、深さ〇・四五mの蛇行する溝である。木簡はこの最上層から一点が出土した。SB五五は、南北に廂をもつ五間×二間の東西棟で、この東南隅の柱抜き穴から木簡一点が出土した。SB五五は奈良時代中期に属する。SD一〇六は奈良時代を通じて機能していた南北溝で、幅三m、深さ一・二mある。堆積土は三層に分かれるが、木簡はその下層から合計一二点(うち削屑八点)が出土した。

### 六 右京八条一坊十四坪(第一七九次調査)

調査区は十四坪のほぼ中心部にあたる。奈良時代の主な遺構として掘立柱建物二四棟、掘立柱塀五条、溝四条、井戸三基等を検出した。遺構は大別してA・B二時期に区分できる。木簡はB期の井戸SE一八八〇の埋土から一点が出土した。この井戸の埋土からは平城宮と同範の軒平瓦が伴出している。なおこの井戸は金属製品の製作に使用されたと推定されている。

### 8 木簡の釈文・内容

一 内裏東方東大溝地区

東大溝SD二七〇〇

- (1)
  - ・×申請暇日事
  - ・×□□□
  - (78)×(16)×1 081
- (2)
  - ・□人主 □□麻呂
  - 廣□<sub>[浜カ]</sub> □□<sub>[魚カ]</sub>
  - 右二人召継 右二人侍従所
  - (197)×43×4 011
- (3)
  - ・「召勝烈斯」<sub>(額田部諸羽、公嵯城五月尾塞古万呂)</sub>
  - ・「八歳十月七日宇治」
  - 「 260×(28)×7 081 \*
- (4)
  - ・「牒上 男繩御所
  - 物部廣公相替請丈部国勝
  - ・「右人上官好申而令下甘檜
  - 殿 九月二日□國中□成」
  - 139×32×4 011 \*
- (5)
  - ・「右依下毛野金仙不食期自今日迄
  - 二日并三箇日御食不奉□□□
  - 
  - 」 149×(20)×4 051
- (6)
  - 「僧房所
  - 
  - 食一升五合
  - 中房預紀福足食。
  - 三月十三日别当佐伯千□□
  - 176×51×5 011
- (7)
  - 御垣本所編十二枚之□□料□
  - ・□□ 九月□三日中衛□□□□
  - (255)×(18)×3 081
- (8)
  - ・「<sub>(穿孔)</sub>造東院所 請藁參□
  - ・「<sub>(穿孔)</sub>嶋万侶行」
  - 」 (196)×35×5 019
- (9)
  - ・「造五丈殿所請合釘四隻各長七寸右為宇相下桁固
  - 料請如件
  - ・「
  - 歲馬
  - 」 362×38×4 011

- (10) 〔  合漆漆  万呂  〕  
 造宮省  
 〔 天平宝字三年卿從三位藤原 〕  
 401×(40)×5 081
- (11) 御贄納三斗 天平宝字六年十二月× (96)×15×3 081
- (12) 紙二百五十七張選文二百五張  
  091
- (13) ×百卅八勝宝五年<sup>〔十九〕</sup>日二百十三夜二百十一〕  
 (175)×15×2 019
- (14) ×日大上天皇〕 (166)×19×3 019
- (15) 〔録主水司大膳  
 北陸道  〕 170×(65)×8 081
- (16) 〔<sup>〔署札〕</sup>造兵司矢作表万呂〕 104×15×3 011 \*
- (17) 〔内隔南方西門籍 (175)×(17)×6 081 \*
- (18) 〔北西門 他田宮成 丈部敷 錦× (149)×16×4 019  
 合四人
- (19) 縣犬甘門  
    九  (82)×(20)×3 081
- (20) 西門川村 大石船守麻呂 給× (223)×34×3 081  
 秦廣安  〕
- (21) 〔口宣 (題籤軸) (52)×(19)×5 061  
 〕
- (22) 〔宿直 (題籤軸) (96)×29×6 061  
 〕
- (23) 〔尾張国智多郡富具郷和尔部臣人足  
調塩三斗天平勝宝七歲九月十七日 (198)×28×3 033
- (24) 〔若狭国三方郡葦田駅子  
 三家人国御調塩三斗〕
- (25) 〔丹波国何鹿郡拜師郷柏五戸秦× (189)×20×9 039  
 〕
- (26) 〔丹後国与社郡日置郷庸米六斗 〕  
 宇良媛部身万呂 〕 283×22×4 031 \*

- (27) 〔駿河国駿河郡子松郷津守部宮麻呂役籠堅魚拾一斤拾兩 天平宝字二年□国司目從六位下息長真人大國当□郡司少領正六位下金刺舎人足人〕 338×26×4 032
- (28) 〔安房国長狭郡置津郷戸主文部黒秦戸口文部第輸凡鯁陸斤 專当国司目正八位下箭口朝臣大足郡司少領外正八位上丈部□郡敷 天平□□ 〕 (496)×18×5 051
- (29) 〔阿波国那賀郡武芸馱子戸主生部東方戸同部毛人調堅魚六斤天平七年十月〕 287×22×6 031
- (30) 〔上総国平群郡狹隈郷□丁若麻績部麻呂養錢六百文〕 77×18×4 032
- (31) 〔参河国芳岡郡比莫鳴海部供奉九月料御贄佐米六斤〕 202×23×3 031 \*
- (32) 〔参河国芳岡郡海部供奉九月料□□×(219)×23×4 039 〕 (37) 〔梅十一〕 81×24×2 032 \*
- (33) 〔出雲国意宇郡飯梨郷中男作物海藻三斤 籠重漆兩 天平勝宝七歲十月 〕 (33) 〔大麥〕 72×18×6 032 \*  
 150×27×5 031 \* (39) 〔附子〕 28×10×3 021
- (34) 〔御野郡出石郷白米五斗 〕 (40) 〔石斛老拾斤〕 99×22×4 031
- (35) 〔天平勝宝八歲米五保倭文部東人〕 161×24×7 033 \*  
 〔備中国乾白魚陸斤〕 133×29×7 031 \* (41) 〔上部字甘〕 117×21×3 032 \*  
 東西溝SD三三三〇
- (36) 〔合カ〕請請解謹解謹解申事解□奈尔波津尔 〕 (42) 〔播磨国賀茂郡下賀□□□□〕 221×21×6 033  
 〔佐久夜己乃波奈□□□□布カ〕 535×(38)×4 081  
 〔民直豊国庸米一俵〕 221×21×6 033

(43) <周防国佐波郡牟礼郷上村里戸辛人麻□□□二枚神亀三年十月>

(234) × 24 × 3 031

溝状堆積 S X 二二九二三

(44) <阿波国那賀郡薩麻駅子戸鵜甘部□麻呂戸同部牛調堅魚六斤□平七×>

261 × 24 × 5 031

(45) <因幡国巨濃郡潮井郷河会里物部黒麻呂中男作物海藻六斤 天平七年七月>

363 × 28 × 3 031 \*

(6)の紀福足は延暦二二年六月一日の「東大寺解」(『平安遺文』八一四二八九)に正六位上行中監物として名前がみえる人物にあたる。この木簡はSD二七〇〇の最上層からの出土であり、年代的にも矛盾しない。(8)~(10)は造営関係の木簡である。この他にも造営関係木簡が数点出土しており、(10)の天平宝字三年の年紀をもつ木簡と同一の層に集中する。天平宝字年間は『続日本紀』によれば、宮の改作が行われた時期であり、今回の一連の木簡もこれと関わる可能性が高い。また、天平宝字三年の時点の造宮卿の名前はこれまで知られていなかったが、(10)の木簡によって、従三位の藤原氏であるから、藤原永手であることがわかる。(17)~(20)は門に関係する木簡である。今回の調査では、東大溝の西の内裏東外郭にあたる場所での多くの建物や塀を検出したが、これらの遺構が門の守衛に関わるものと考えられることもできよう。貢進荷札では(3)の木簡が注目される。これまで参河国幡豆(芳図)郡の贄貢進荷札は析嶋と篠嶋の二カ所の例のみ知られていたが、二つの島に挟まれた日間賀島(比莫嶋)からも

贄が貢進されていたことが判明した。比莫嶋の贄の荷札は次の佐紀池南辺地区からも出土している(後掲)。(27)・(28)は専当官の記載がある荷札である。以前の出土例と合わせて、専当官の荷札は四点となった。(24)・(29)・(44)には駅子の名前が記されているが、いずれもはじめて知られた駅名である。

二 佐紀池南辺地区

木屑・炭層

- (1) <伯耆国相見郡巨勢郷雜腊一斗五升養老□年十月>  
197 × 14 × 3 031
- (2) <若狭国遠敷郡調塩一斗□果□>  
169 × 34 × 5 031
- (3) <讚岐国香川郡細郷生壬得万白米五斗>  
183 × 23 × 5 031 \*
- (4) 「丹比門十二月番下□  
・麻呂  
(116) × 24 × 2 019

- (5) 河  
 丈部若麻呂 丈部若麻呂  
 天剛々々 天剛々々  
 熱□  
 丈部若麻呂 丈部若麻呂  
 天剛々々 天剛々々  
 長□  
 「急々如々律々令々」 (右側面)  
 「急々如々律々令々」 (左側面) 120×76×18 011 \*  
 (6) 「大林薦」 125×23×3 031 \*  
 (7) 「供御糸十約」<sup>〔耳カ〕</sup> 112×21×5 032 \*  
 (8) 「染司在釜一口」<sup>深一尺八寸</sup>  
飯  
部造得末呂作<sup>膳職</sup>  
者未  
足三在入六斗釜二口受 (121)×(35)×7 081  
 (9) 「参河国芳豆郡比莫嶋海部供奉四月料大贄」  
黒鯛六 202×18×3 032 \*  
 (10) 「美濃国麦門冬五升」 (141)×23×3 039 \*  
 (11) 「主水司布一端六尺」 140×20×3 032 \*  
 (12) 「南方帳十一」  
副 136×23×6 032  
 (5)は特異な記載を持つ呪符木簡である。出土した層から考えて、奈良時代の前半に遡ることになり、呪符木簡としては藤原宮跡第四次出土のもの(本誌掲載)とともに最古の部類に属する。  
 東西溝SD二二九六五  
 (13) 「讚岐国香川郡細郷秦公」 (103)×21×5 039  
 (14) 「左弁」<sup>〔官カ〕</sup>  
 今五 廣二丈  
 ・「丈部伯麻呂 伯麻」 (106)×27×3 019  
 井戸SE三九三〇  
 (1) 「小郷弟国」 (97)×26×6 039



五 左京三条二坊七坪

溝SD一四

(1) ・「尾張国海部郡嶋里」

・「<sup>〔末カ〕</sup>連□□□□□□」

159×28×8 011

坊間路西側溝SD一〇六

(2) □□ 并□□人等上日帳」

356×50×9 061

(3) 正宮四人 内蔵一人

(156)×16×2 011

(4) 播磨国神前郡陰山郷□×

(162)×(18)×4 081

(5) 〱厨布直銭二貫

(123)×21×3 039

(6) ×年二月料御贄字波加六斤」

(120)×18×6 019

(2)は木箱の蓋に墨書したものである。(3)は上・下端が二次的に削られている。

六 右京八条一坊十四坪

井戸SE一八八〇

(1) 「秦五 米一斗十一月十七日□」

164×25×5 051

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九八七』(一九八七年)

同『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九八七年)

同『平城宮発掘調査出土木簡概報(其)』(一九八七年)

(寺崎保広)

1986年出土の木簡

